



粋に触れ
雅を感じる
台東の夏!

Enjoy! 'Cool' and 'Grace' of Taito Summer

画像提供：台東区

The pioneering Japanese fireworks festival 日本の花火大会の草分け 隅田川花火大会

夏、といえば花火。花火は江戸時代から人気の大きなイベント。花火の描き出す錦の美しさ。夜空をバックにキラキラと舞う花火の姿は今も昔も人々の心をつかんで離しません。

江戸時代の両国川開き大花火、現在の隅田川花火大会は記録に残る最古の花火大会です。「暴れん坊将軍」などのドラマでも有名な、徳川8代将軍吉宗の時代、上方の飢饉や江戸のコレラによる死者への慰霊と悪霊退散を祈って、1733(享保18)年に両国大川(隅田川のこた)の水神祭りが開催されました。この時、大花火が披露され、これが両国川開き大花火の起源となったようです。

最も古い花火業者は、東京(当時の江戸)の宗家花火鍵屋。1659(万治2)年に鍵屋初代 弥兵衛が線香花火の原型とされているおもちゃ花火を売り出し繁盛しました。その後、1810(文化7)年に鍵屋から暖簾分けを許された玉屋が店を構え、両国の川開きの際には、両国橋を挟んだ上流で玉屋、下流では鍵屋が打ち上げ、技を競ったとのこと。意外と知られていないのが、こうした「町人花火」に対する、武士が打ち上げる「武家花火」。尾張、紀州、水戸の徳川御三家には火薬製造の制限がなく、かなりの規模だったと言われています。

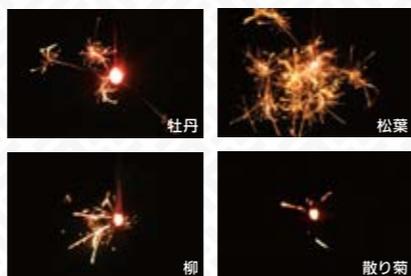
明治期には、様々な薬品が輸入され、それまで出せなかった色彩が花火でも出せるようになります。新しい手法で作られた花火を「洋火」、以前の製法で作られたものは「和火」と呼ばれます。

1985(昭和60)年に鍵屋14代目の天野修さんが電気点火システムを開発したことにより、それまでと違って比較的簡単に少人数で花火を打ち上げられるようになりました。

現在の隅田川花火大会は、かつての「鍵屋」「玉屋」の競い合いに範を求め、両国ゆかりの花火業者7社と、全国の花火競技大会などで好成績を収めた3社の合計10社が、花火の美しさや技を競います。



蔵前周辺には玩具とともに花火を販売している店舗が多くあります



※このコラムは「山縣商店」の情報を参考にさせて頂きました。

■ 線香花火は日本の心

花火大会は夏の大きなイベントですが、線香花火は家庭で手軽に楽しめる日本の風物詩です。手に持って遊ぶようなおもちゃ花火を江戸時代に鍵屋が売り出すと、またたく間に庶民の楽しみとして広まり、今でも夏の楽しみとして欠かせないものとなっています。線香花火には大きく二つの種類があり、上方(関西)では「スポ手」と呼ばれる葦の茎の先に火薬がついたもの、江戸では和紙のこよりで火薬を包んだ「長手」が主流だと言われています。燃え方にも起承転結があり、火をつけて先にできる赤い玉は「牡丹」。火が激しく火花を発する「松葉」。長く糸をひく「柳」。消える直前が「散り菊」と呼ばれます。使われているのは、たった0.1mgの火薬。そのわずかな火薬が生み出す線香花火の美しさ。日本の伝統美をご家庭で楽しんでみませんか。

Grew up with the history of Japanese samba : BARBAROS

日本のサンバの歴史とともに歩むバルバロス

台東の夏の大きなイベントとして欠かせないのが「浅草サンバカーニバル」。そこで「浅草サンバカーニバル」にも参加する「G.R.E.S. 仲見世バルバロス」の執行部 福島さんにお話を伺ってきました。

「仲見世バルバロス」は、1980(昭和55)年の「浅草サンバカーニバル」のプレ・カーニバルに合わせて結成。高橋重雄さんと諸橋稔さんが中心になったグループが元になり結成されました。ブラジル音楽やダンス好きの人を集め、本格的なサンバの研究を重ねていき、1985年には実際にブラジルでのサンバ視察。1991年にはオリジナル曲『青-白の旗』を制作し、そして1993年、テーマに沿った楽曲や衣装、アレゴリア(山車)などを用いるストーリー性豊かな本場ブラジルのサンバパレードのスタイルを確立。「仲見世バルバロス」は実質的に関東最大級のサンバチームへと成長してきました。

2008(平成20)年に亡くなられた先代のリーダー高橋重雄さんはそうした「仲見世バルバロス」の中核として活躍をしただけでなく、多くのサンバチームへの助言やサポートを行うなど、日本のサンバ界へ多大な影響を与え、現在も多くのメンバーが親しみを込めて「リーダー」と呼んでいます。

過去30年の「浅草サンバカーニバル」で「仲見世バルバロス」は18回の優勝経験があります。「優勝を念頭においていない訳ではありません」「しかし、私たちが最も大切にしていることは、心地よくいい状態のチームの歴史を、ちゃんと伝えてゆくこと。多くの人が思っているような、ただ楽器が鳴って、ダンサーが踊っているだけがサンバなのではありません。いろいろな人が一緒に何か素敵なことや時間を作り上げる、そこにサンバの基本が隠れているのです」と福島さん。

「仲見世バルバロス」では常にメンバーを募集しています。「参加してみたい、楽しんでみたいという方はいつでも練習会に遊びに来てください。もちろん、パーティやお祭りなど、呼んでいただければ伺います」とのこと。



▲20年以上お世話になったスタジオが道路拡幅によって閉鎖されることに。最後の合同練習の際に全員で記念撮影

記事写真：サイキカツミ(株式会社 ドゥ・アーバン) 集合写真：仲見世バルバロス



▲本番さながらの合同練習



▲サンバはリズムが大事

■ サンバの原型は黒人音楽

ブラジル開拓のためにアフリカの黒人奴隷たちがリオ・デ・ジャネイロに持ち込んだバトゥカーダ(Batucada)という4分の2拍子の打楽器のみのリズム音楽が、元々のブラジルのリズムやポルトガルから伝えられたヨーロッパのマズルカやポルカなどと融合して発生したのが、今のサンバの原型だと言われています。

※5月26日に行われた「たいとうにぎわいフェスティバル」での一コマ

■ 浅草サンバカーニバル

1981(昭和56)年に当時の台東区長 内山榮一氏と浅草喜劇俳優の伴淳三郎氏(共に故人)の提案により、浅草の新しいイメージをつくるために始まった「浅草サンバカーニバル」。今年で31回目。徐々に規模が拡大し、現在、日本最大のサンバカーニバルのコンテストとして知られています。全国から集まったチームを、テーマ、躍動感、衣裳、演奏、ダンスなどのカテゴリーによって採点するかたちで、コンテストが行わ

れます。それぞれのチームの特色を楽しむのもよし、「自分が審査員なら、どこに投票しようか」と考えながら見るのもよし。夏の浅草を彩る粋なイベントを楽しんでみてください。(p13参照)

第31回浅草サンバカーニバル パレードコンテスト
日時：8月25日(土)
13:30~18:00(予定)
場所：馬道通り~雷門通り
主催：浅草サンバカーニバル実行委員会